文化

いくつもの時間

鷲田　清一

わしだ・きよかず　1949年京都生まれ。哲学者。京都市立芸大理事長・学長。せんだいメディアテーク館長。著書に『「聴く」ことの力』「哲学の使い方」など。

六年前、わたしは長く勤めた国立大学を辞して、家の近くにある京都の小さな仏教系の大学に移った。十年近く、柄にもない大学の管理職についていたので、ここで元の現場に戻り、人生の最後を「教員」として勤め上げようとおもっていた。

そんな折り、教室の最後列で聴講し、なぜかきまって途中で退出する学生がいた。あきらかに社会人とおぼしき風貌の人である。その人が翌年、大学院をふつうの倍、四年間かけて学ぶ「社会人枠」で入学してきた。新学期の最初のゼミでのこと。ざわつきがいつもとちがう。みなわずかに退いている。少し離れてひとり立つその御仁（ごじん）は、学生や職員たちのよく知る関西の人気ラジオ・パーソナリティなのだった。

慣れない哲学の用語に苦しみながらも、仕事の後、家で原書講読の予習をし、少しずつ哲学の考え方にもなじんでいって、三年目くらいだっただろうか、ようやっとじぶんの課題を見つけ、昨年末、論文を書き上げた。インタビュアーとしてのじぶんの仕事の意味を掘り下げたかったらしく、マルティン・ブーバーの著書を手がかりに、「他人を理解する」というのがどういうことかを論じたのだった。いろんなレギュラー番組をもち、さらにそのための取材をこなしていて、完全な休みは月に一日くらいというなかで、よく書いたことおもう。

◇　◇　◇

その彼女が論文を提出したあと、しみじみとこう言った。「大学って、早く出たいけどずっといたい不思議なところですね」

この言葉にわたしのほうが感極まった。おもうに二つの理由からである。一つは、この二十年ほど「改革」に揺らいできた大学だが、大学というところはよほどのことがなければその仕組みも校風も変えてはならない。卒業後も迷えばいつでも戻ってこられるように。そのことを再認識させてくれたから。

いま一つは、日々の暮らしにおけるもう一つの時間の大切さである。くだんの彼女は、息を抜くこともできない番組制作のあいまに、ずっと持続する別の時間をもつことになった。急いで答えを出そうと焦ることもなく、一つの問いを温め、それについてゼミ生とも存分に語りあえた。いっそう忙しくなったはずなのに、彼女にとってそれは別の呼吸をすることであった。

望もうにも、もう一つの時間をもつというのは実際のところむずかしい。親の介護やペットの世話に明け暮れる人、子育てにかかりっきりで息も抜けない人、1日のほとんどの時間を組織の課題で刻んでいる人……。じぶんの時間なのにじぶんでどうこうできない人たち、時間に「あそび」の幅をもたせられない人たちが、世の中にはいっぱいいる。

◇　◇　◇

一つの時間を生きる、あるいは一つの時間をしか生きられないというのは苦しいことである。生きものとして人間に無理をかけるからである。

人はいろんな時間を多層的に生きるポリクロニックな存在である。仕事にあたりながら、心ここにあらずといった感じで別の思いをずっと引きずったままのときがある。手が止まり、放心したかのように思い出に浸るときもある。ずっと心に引っかかるものがあって、一つのことに集中できないことがある。過去へと流れ去ってくれないトラウマに心がじくじく疼（うず）いたまま、というときもある。そのように意識がさまざまの時間に引き裂かれ、一つにまとまらないというのは、さしてめずらしいことではない。

ふだんはほとんど気づかれることもないが、人の内にはさまざまに異なる時間が流れている。呼吸が刻むリズム、消化をになう内臓のうねり、月経の周期、刻々と入れ替わる細胞の時間、そしてその全体の老い。そうしたさまざまに異なる時間が、ときに眠気や疲労感や空腹感のかたちで、あるいは尿意や便意、陣痛のかたちで、意識の時間に割って入ってくる。「そわそわ」とか「じりじり」といった焦燥感が意識の時間をひきつらせることもしばしだ。

◇　◇　◇

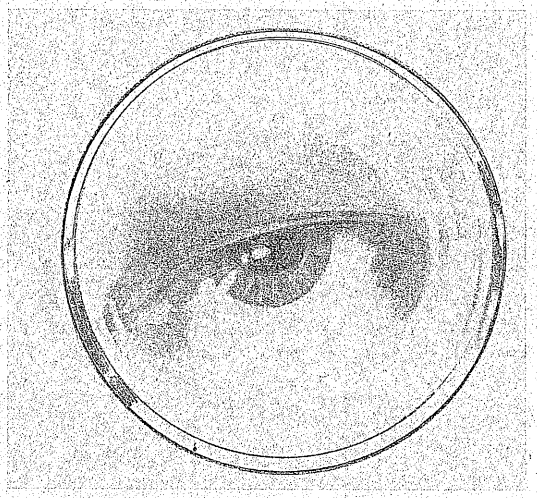
ゆたかに生きるというのは、それぞれの時間に悲鳴をあげさせないことだ。どれか一つの時間が別の時間に無理をかけているというのは、生きものとして不幸なことだ。が、たいていの人はこの無理を押し隠そうとする。抑え込もうとする。

それだけではない。人は他の生きものともいっしょに生きている。老いた家族や幼い子どもとの時間、ペットとの時間、栽培している植物との時間。そういう時間のなかにじぶんをたゆたわせることもできずに、いまは仕事で忙しいから、しなければならないことがあるからと、耳を傾けずにそれを操作しようというのは、生きものとして歪（ひず）なことである。余裕のなさから出たその言葉が、自身のみならず、同じ時間をともに生きる相手を想像以上に痛めていることを知るべきだ。

齢を重ねたはてに知る寂しい事実がある。ずっといっしょに暮らしてきた、比喩でいえばずっと同じ列車に隣り合わせて乗ってきたと思っていた連れ合いが、じつは同じ速度で走る隣りの列車に乗っていただけのことだと思い知らされるときだ。ずっと前から線路は知らないうちに少しずつ離れ、気がついたときは隣の列車は声をかけても届かないほど遠くに隔たっていたということがある。

時間はいくつも持ったほうがいい。交替でもいいが、できれば同時並行のほうがいい。

論文を書き上げ、ほっとして「早く出たいけどずっといたい」という思いに浸ったくだんの彼女の物言いは、二つの違う時間をもてたという幸福の言葉としてあったのだとおもう。



アナタハナニヲミテイル？

川口　起美雄

幸福　口福
ドアを開けるとメガネが曇る。ふと気づく煮物の温かなにおい。よし晩酌は「純米あらばしり」だ。割水や加熱処理をしないピュアな味、産まれたての生原酒が手料理を引き立てる。やはり団欒に美酒。今年も真澄をよろしくお願い申し上げます。
◎注文は真澄取扱店または弊社まで。
純米あらばしり
☎0266(52)6161
www.masumi.co.jp
お酒は20歳になってから
長野県諏訪市元町七号酵母発祥の酒蔵
宮坂醸造株式会社
真澄 MASUMI